

1943（昭和18）年2月20日――。

鶴見に生まれしひとりの男の子。姓名・猪木寛至、鬪魂の火種……。

古館伊知郎ふるたちい ちろうの「猪木引退実況」のように将来確実に描かれるであろう「アントニオ猪木物語」は、「スター・ウォーズ」のOPロールのように十年百年千年と代々語り継がれてきた英雄神話的なストーリーとして、その偉大なる男の出生から語られるだろう。

物語の結末は2022年10月1日だった。享年79。

猪木逝去の訃報が流れたこの日、ボクは国会参議院会館にいた。

此処ここに至るまでの数か月、ボクも急転直下の激動の日々が続いていた。ボクは60歳の還暦を契機に「人生の生き直し」を掲げ、急遽きゆうきよ一大決心で参議院議員選挙に立候補し、新たな道へ踏み出した。その頃、猪木も2019年秋から続く難病・アミロイドーシスの闘

病中、ボクは選挙期間中「炎のファイター」をアレンジした応援歌を選挙カーで流し、深紅の闘魂タオルを首に纏まとって演説に立ち、病床の猪木にエールを送っていた。

言うまでもなく、選挙とは現代の戦であり、闘いそのものである。政治記者に戦況を聞かれるたびに「出る前に負けること考えるバカいるかよ！」と猪木語録を繰り返した。

日本列島を東奔西走、声をからし、汗だくで初夏の選挙戦を駆け抜け、そして7月10日の運命の投票日、日付を越した深夜に初当選を果たし、人生の絶頂を味わいながらも……2〜3か月が過ぎる頃、精神的な不調に陥り、鬱が再発、新天地の日々が一転した。真っ暗闇のどん底でひとり喘あえいでいるところに、この訃報ぼくせんがもたらされた。

当然のことながら茫然ぼうぜん自失、かつて経験のない喪失感に浸り、マスコミからのすべての猪木追悼文コメント、文章の依頼も断っていた。

ターザン山本は「水道橋博士は猪木の人生に傾倒し、猪木を真似まねて国会議員になって、猪木の死の喪失感とともに鬱に陥ったわけですよオオオ!!」と相変わらずの見立てを吠ほえていたが……。しかし、そのご指摘は当たらずとも遠からず。さしずめボクは初めての「国会に叩固め」されてギブアップを余儀なくされたのだろうか。まさかこんなことにな

るとは。猪木語録で言えば人生は「一寸先はハプニング」なのだ。

しかし、訃報から半年が経ち、今は体調も回復してきた。遅まきながらアントニオ猪木との極私的<sup>おも</sup>な<sup>で</sup>想い<sup>つづ</sup>を出話を綴りたいと思う（文章は敬称略で書かせてもらいます）。

古今東西、英雄神話の物語は主人公の流離譚<sup>たん</sup>から始まるものだ。

アントニオ猪木は大家族11人兄弟の9番目、六男坊で横浜市鶴見区に生まれる。吉田茂と懇意で政治家を志していた父を5歳で亡くし、一家は経済的に追い詰められ、移民としてブラジルに将来を託すことになる。

しかし、横浜港からさんとす丸に乗船し、航海中、一家の大黒柱にして父親代わりの祖父が寄港地で買った青いバナナを食し、腸閉塞を発症し、死去。甲板で葬儀が行われ、水葬されることになる。カリブ海が夕陽<sup>ゆうひ</sup>に照らされるなか、日の丸の旗で包まれた棺<sup>ひつぎ</sup>は、クレーンで釣り上げられ水面へ降ろされると500人の乗客に見守られ、白い泡とともに深<sup>の</sup>海に沈んでいく。赤道直下の水平線に汽笛<sup>むせ</sup>が咽び泣く。猪木は、このとき船長が遺した「君のおじいさんは海の守り神になったんだよ」という言葉を永久に忘れられないと何度

も述懐している。猪木は14歳ながら「生きなおす」航路の途中で「死」と「生」の交叉こうさを  
目の当たりにして、運命とは切り開くものだと悟ったのだ。

猪木の自伝を読むと誰もがこの水葬シーンに息を呑のむし、まるで自分が体験したかのよ  
うに、このエピソードが心に強烈に焼き付いている。

そして、新天地のブラジル・サントス港に降り立った竟さう至少年は一家揃そろってコーヒー農  
園に放り込まれ、前世紀のこととて考えられないような過酷な開墾事業、奴隷労働に身を  
やつすことになる。3年後、日本の英雄・力道山率いる日本プロレスのブラジル遠征で、  
陸上競技に秀でた人並み外れた体軀の日本人移民の青年として見いだされて日本に渡るこ  
とになる。

猪木のブラジル時代だけでも「映画化決定！」と思えるほど過酷で波乱万丈な物語のは  
じまりだ。

ボクが猪木に魅入られていくのは田舎の中学生のときだ。

倉敷から岡山の国立大学附属の進学校を受験して越境入学したものの、勉強ができない

という挫折を味わい落ちこぼれていくなか、日夜、自分の人生の指標となるような引力を持つ恒星の出現を待ち望んでいた。「いつか誰か、ここから連れ出し、運命を変えてくれないか？」と心のなかで呟つぶやきながら。当時、ボクの人生を決定づける導師・ビートたけしの存在は、まだ影も形もなかった。